

杏雲堂平塚病院にみる平塚市浜岳地区の変遷に関する研究  
 A Study on the Transformation of Hamatake District in Modern Hiratsuka City  
 through Kyoundo Hiratsuka Hospital

○松本奈々<sup>1</sup>, 押田佳子<sup>2</sup>  
 Nana Matsumoto<sup>1</sup>, Keiko Oshida<sup>2</sup>

**Abstract:** In this study, we investigated the spatial changes in the Hamatake district of Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture, following the establishment of Kyoun-do Hiratsuka Hospital. As a result, while the influx of patients initially shaped the townscape around the hospital shortly after its founding, it was confirmed that the connection between the hospital and the surrounding residential areas was completely severed after the war.

1. 背景及び目的—近代日本における結核は、国民病と言わしめるまでに恐れられた病気であり、自然療法ともいわれるサナトリウム療法は最も有効な治療法として用いられた<sup>[1]</sup>。この療法には長期療養のための施設「サナトリウム」が必要とされ、東京の病院の分院として建設されるケースが多く、東京から鉄道で移動しやすく、かつ温暖な気候の神奈川県湘南地域に建設された。具体的には、鎌倉市の海浜院や茅ヶ崎市の南湖院をはじめ12軒が建てられ、それらを中心とする患者コミュニティが展開された<sup>[1][2][3]</sup>。1896年に平塚市浜岳地区に開院した杏雲堂平塚病院は、東京都千代田区神田駿河台にある杏雲堂病院(以降、本院)の分院で

あり、東京の資本が投入された最初の事例とされるが、閉院までの108年間に当地に及ぼした影響については、ほとんど明らかにされていない。

以上を踏まえ、本研究では、杏雲堂平塚病院の設立が浜岳地区に及ぼした影響を周辺空間の変遷より、捉えることを目的とする。

2. 研究方法—調査概要をTable1に示す。本研究では、杏雲堂平塚病院が建てられた平塚市浜岳地区を対象とする。

3. 結果及び考察—杏雲堂平塚病院設立以降の浜岳地区に関する出来事をTable2に示す。調査結果をもとに、調査対象期間を、設立期(1896年10月10日~1899年12月31日)、発展期(1900年1月1日~1922年12月31日)、転換期(1923年1月1日~1948年12月31日)、再生期(1949年1月1日~1965年12月31日)、終焉期(1966年1月1日~2004年4月30日)の5期に大別した。以降これらに従い、結果及び考察を述べる。

3-1. 設立期—Table2より、1896年結核療養所として設立され、佐々木政吉が分院長に就任してほどなく、病床数が増加された。さらに松林の保持のため、海岸に接する約7千坪が拡張された<sup>[4]</sup>。当時の医師によると、浜岳地区には民家が少なく、周辺に畑や果樹園が広がっていたことから<sup>[4]</sup>、病院敷地の拡張は容易であったと推察される。

3-2. 発展期—Table2より、高山樗牛や有島武郎など著名人をはじめ、多くの人々が通院のために別荘を建てたり、旅館に泊まるなどして療養したことから<sup>[4]</sup>、杏雲堂平塚病院の周辺には通院患者によるコミュニティが形成されていた。また通院患者の多くは、本院からの紹介を受けて訪れており、結核療養のために、より良い環境を求めていたことが捉えられる。

3-3. 転換期—Table2より、戦火が激しくなり、病院東側に隣接する海軍工廠が米機の攻撃目標となった

Table1. 調査概要

1. 文献調査 <sup>[4]~[13]</sup>	
調査対象	「杏雲堂平塚病院 100 年史」「湘南平塚浜岳の歴史」「文学者たちの神奈川」「文学者たちの神奈川明治編」「平塚ゆかりの文人たち」「平塚の歴史」「雑誌浜岳 23 号」「雑誌浜岳創刊号」「海辺の憩い 湘南別荘物語」「平塚の別荘地時代」の計 10 冊 <sup>[4]~[13]</sup>
調査内容	杏雲堂平塚病院設立後から捉える平塚市の変遷に関する記載の抽出
2. ヒアリング調査	
調査対象	平塚市幸町在住 2 名 (T 氏: 83 歳, K 氏: 82 歳), 2025. 06. 15 に聴取
調査内容	杏雲堂平塚病院が存在していた時期における浜岳地区の地域住民を対象として、当該病院に対する印象や評価に関する聞き取り調査を実施
3. 調査対象地	

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち

ため、大空襲を受け、病院の一部が損壊した。これに伴い、医師たちは病院を離れ、海寶寺(現在の幸町)で治療にあたるなどの地域医療への参加や<sup>[10]</sup>、市内の他地域で新たに病院を開業するなど<sup>[10]</sup>、病院出身者が市内各地で地域医療に貢献した様子が捉えられた。

**3-4. 再生期**—Table2 より、戦後平塚市により敷地の一部が接収され、規模が縮小した。また、結核医療の進歩と過去のイメージ払拭のため、結核専門病棟から一般総合病院へと転換を図ったが、周辺住民からは、学校で病院には近づいてはならないと声掛けされるなど、偏見が持たれていたことをT氏のヒアリングより捉えた。さらにTable1 より、1940年頃には海岸道路沿いに団地が新設されるなど、病院と無関係に大規模な宅地開発が進められ、設立期、発展期にみられた通院患者によるコミュニティとは異なるまちづくりが展開された。

**3-5. 終焉期**—Table2 より、約100年続いた結核病棟の閉鎖、並びに敷地のさらなる縮小を経て、完全な一般総合病院へと転じたが、病院経営は立ち行かず、2004年4月に閉院した。これは、かつて地域を支えたサナトリウムが負の遺産として捉えられた結果といえ

よう。

**4. まとめ**—以上より、浜岳地区は杏雲堂平塚病院建設に伴う病院を中心としたまちから、サナトリウムのイメージが負にはたらいたことで、徐々に規模を縮小、最終的には病院そのものの存在が脅かされることになったことを捉えた。一方、転換期にみられた出身医師の地域医療への貢献は、その後平塚市内で拡大し、現代の医療体制に受け継がれているといえよう。

**5. 謝辞**—本調査遂行にあたり、ヒアリング調査の対象者様並びに浜岳中学校のご関係者の皆様にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

**6. 参考文献**— [1] 押田佳子:南湖院ゆかり文士を通してみた近代茅ヶ崎における地域イメージ変容に関する研究, 2019年, 82巻, 5号, pp. 589-592 [2] 倉津耕大, 押田佳子, 片山風花:近代湘南メダイカルツーリズム以降の由比ガ浜中央商店街継承プロセスに関する研究, 2018年 [3] 結核に縁(ゆかり)の地歴訪 [4] 杏雲堂平塚病院100年史, 1997.09.11 [5] 湘南平塚浜岳の歴史, 2011.11.28 [6] 文学者たちの神奈川, 1995.03.25 [7] 文学者たちの神奈川明治編, 1991.02.15 [8] 平塚ゆかりの文人, 1993.12.22 [9] 平塚の歴史, 1994.07.14 [10] 浜岳23号, 2024.06.01 [11] 浜岳創刊号, 2014.02.01 [12] 海辺の憩い湘南別荘物語, 2000.11.15

Table2.杏雲堂平塚病院の各期における浜岳地区の主な出来事

時期	年月日	内容
設立期	1896.10.10	杏雲堂平塚病院が開設(須馬村廣ヶ原). <sup>[4] [5] [8] [9] [10] [11]</sup>
	1900	高山樗牛(30)が西洋留学を前に咯血で倒れ、杏雲堂本院に入院. <sup>[4] [7] [8]</sup>
発展期	1900.09.11	高山樗牛(30)はじめて平塚海岸の杏雲堂分院で受診. <sup>[8]</sup>
	1900.12.13	高山樗牛(30)興津から平塚に移る. 24日まで翁屋旅館に滞在. <sup>[8]</sup>
	1902	富安風生(27)平塚の杏雲堂に入院する. 翌年帰京. <sup>[5]</sup>
	1902.03.14	高山樗牛(32)多量の咯血をし、絶対安静の日が続く. <sup>[8]</sup>
	1902.04.07	田波御白(26)は平塚に行き、杏雲堂に入院. <sup>[6]</sup>
	1902.10.25	高山樗牛(32)のみ平塚の杏雲堂病院に入院する. <sup>[8]</sup>
	1902.11	前田青邨(27)平塚に転地療養をする. <sup>[6]</sup>
	1902.12.20	高山樗牛(32)危篤状態になる. <sup>[8]</sup>
	1902.12.24	高山樗牛(32)13:30、病院にて永眠. <sup>[8]</sup>
	1913.08.04	有島武郎(36)妻安子を平塚杏雲堂病院に入院させる. <sup>[6]</sup>
	1915.02	佐々木隆興が本院・分院の院長に就任. <sup>[8]</sup>
	1916.04.05	有島武郎(38)妻安子を平塚杏雲堂から近くの借家に移す. <sup>[6]</sup>
1916.05.03	有島武郎(38)平塚に行き、妻安子の容態急変を知り、親族に知らせる. <sup>[6]</sup>	
転換期	1923	関東大震災で本院全焼、分院倒壊. <sup>[5] [10] [11]</sup>
	1931	海岸線に現国道134号線の前身となる、湘南遊歩道が開通している. <sup>[11]</sup>
	1937	平塚分院の新病棟落成。X線胸部断層撮影装置導入. <sup>[5] [11]</sup>
	1942	財団法人佐々木研究所に寄付され杏雲堂療養所と改称. <sup>[4] [11]</sup>
	1945.07.16	大空襲により病棟の一部を残して全館が焼失. <sup>[4] [5] [10] [11]</sup>
再生期	1949	肺外科の新設。ようやく現在の外来本館の落成をみた. <sup>[4]</sup>
	1951	3年かけて横須賀の富士自動車健康保険組合、横浜の古河電工横浜工場の健康保険組合が国庫の補助金を受け、結核療養目的で当療養所構内に造った病棟(80棟)と隣接地の林野庁営林局の保養所(60床)の診療を杏雲堂が担当. <sup>[4]</sup>
	1952	終戦後数年を経て市の復興計画より平塚療養所の敷地が東西に分割、病院の中央を南北に25m道路、また北側は東西にも道路が通り、病院の敷地は大量に無料接収され、病院は東西2つのブロックに分割された. <sup>[5] [10] [11]</sup>
	1954	結核専門の療養所から脱皮、地域住民の医療要請に応えられる一般総合病院へと転換し外来本館が新築された. <sup>[4] [11]</sup>
	1954.06	外来本館の再建ができ、診察室、検査室、X線室、薬剤室、事務室等が整備された. <sup>[4]</sup>
	1959	一般病棟へ転換。再び財団法人佐々木研究所附属杏雲堂病院分院と改称. <sup>[4] [5] [10] [11]</sup>
1963.01	一般病棟と手術室が新設. <sup>[4] [11]</sup>	
終焉期	1966	杏雲堂平塚病院と改称。診療科目は外科、循環器科、消化器科、呼吸科で、一般病棟へと脱皮. <sup>[4]</sup>
	1967	呼吸器病棟の増築. <sup>[5]</sup>
	1970	医学の進歩により受託医療が相次いで閉鎖. <sup>[4]</sup>
	1970.12	結核患者の減少に伴い高浜台地区52床の収容を中止. <sup>[4]</sup>
	1977	整形外科が追加された. <sup>[4] [5]</sup>
	1978	東側(高浜台)敷地を住宅公団に売却、西側(袖ヶ浜)敷地に施設を集約. <sup>[5] [11]</sup>
	1985	松風町の敷地(佐々木別荘)を売却(現在のエルザ湘南平塚). <sup>[11]</sup>
	1995.03	結核病棟を閉鎖. <sup>[4]</sup>
1997	老健施設の湘南シルバーガーデン竣工. <sup>[4] [11]</sup>	
2004.04	平塚病院閉院. <sup>[5] [10] [11]</sup>	

